

ターナーレー(ナードスル)第7窟浮彫の考察
—西インド初期歴史時代における仏教石窟寺院への新視点—

関西大学 豊山 亜希

19世紀半頃より本格化したインド石窟寺院の研究は、ファーガソンとバージェスによる『インドの石窟寺院 (*The Cave Temples of India*)』(1880)の上梓をもって、一定水準の網羅性を獲得した。しかしながらその後も、学術的俎上に載せられたという意味における、現存例の「発見」は続いている。その多くは小規模で自然的・人為的要因による損壊が著しいが、本発表において取り上げるターナーレー石窟群は、例外的な規模の大きさと、美術史的考察に堪えうる荘厳がなされた開鑿例である。

インド西部のマハーラーシュトラ州ライガル県に所在するターナーレー石窟群は、先行研究においてはナードスル石窟群の名で知られてきたが、遺跡に最も近接する集落名をあてる原則に従い、近年ではナードスル村より石窟群に近接するターナーレー村の名を冠した呼称が定着しつつあることから、本発表においてもこれを採用する。

1890年にイギリス人宣教師アボットが同石窟群を発見したのは、西デカン地方に所在する仏教石窟寺院が、ほぼ例外なくアラビア海沿岸の港湾地域と内陸都市を結ぶサヒアードリー山脈の峠に立地する点に着目し、『エリュトラ海案内記』に言及される古代港シミュラ(現在のチャウル)を起着点とする行路にも、同様に仏教石窟寺院が存在するとの想定で踏査を実施した結果であった。

アボット以降の研究は、遺跡の所在地に至る道程が困難であるなどの理由から、盛んに成果提出がなされてきたとは言い難いものの、主としてチャイティア(祠堂)窟、ヴィハーラ(僧院)窟、ストゥーパ(仏塔)窟の構造的・様式的考察と編年を趣旨としてきた。とりわけ、窟群中最大のヴィハーラ窟である第7窟は、矩形の広間を僧房が取り囲む構造を呈し、各房室の入口上部および入口両脇に設けられた壁龕上部を中心に施された浮彫装飾に関して、1970年代にデヘージアによって、バージャー第19窟やサンチー第2塔との様式的類似が指摘された経緯があるものの、本格的な考察はこれまで全く提出されてこなかったといつてよい。

発表者は、ターナーレー第7窟浮彫を特徴付ける全体的な彫りの浅さ、画面構成の単純性、着衣の精微な細部表現といった要素は、同時代の仏教美術との影響関係にとどまらず、テールをはじめとする初期歴史時代の考古遺跡から出土した、象牙製および粘土製小像との様式的関連からも検討されるべきものと考ええる。こうした考古遺跡においては、しばしばバラモン教に帰属するとみられる宗教的遺構とともに、『エリュトラ海案内記』に語られる地中海交易の存在を裏付けるアンフォラ片などの遺物が検出されている。そこで本発表においては、古代港シミュラと内陸の諸都市を結ぶ行路上に開かれたと推察されるターナーレー石窟群の浮彫装飾と、周辺の考古遺跡から出土した小像群との比較検討を中心に、初期歴史時代の西インド地域における文化的様相と仏教石窟寺院の造営意義の実際について、美術史的局面から復元することを試みる。